



ICT 海外ボランティア会会報

No. 49

2014年4月24日(木)

Home page : <http://www.ictov.jp/>

e-mail : sv@info.nttob.org

目次

◆ 特別寄稿

エラーを恐れずトライせよ

ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝氏

◆ 技術協力の思い出 (4)

カンボジャで義足支援 –その25周年記念行事に参加–

地震廃絶日本キャンペーン代表 北川 泰弘氏

◆ トンガプロジェクト

トンガ王国における防災 ICT パイロットプロジェクト完了

(一財) 海外通信・放送コンサルティング協力 (JTEC)

通信技術・システム部長 田村正人氏

◆ JICA 訓練所訪問記

“ボランティア候補生は輝いていた”

ICT 海外ボランティア会事務局長 加藤 隆 氏

◆ JICA SV 2014年度春募集のお知らせ

事務局

◆ 現地便り (コロンビア便り 4)

三輪車の走る街

JICA SV 野村 徹氏

◆ 第7回 海外情報談話会開催模様

事務局

◆ 第8回海外情報懇談会開催のお知らせ

特別寄稿

エラーを恐れずトライせよ

ICT海外ボランティア会顧問 石井 孝

【真藤 恒氏語録】

誰でも、背任行為をしたとき厳罰を受けるのは当然のことである。それでは何か仕事をして失敗したらどうか。減点主義で臨むか。漫然と仕事をして失敗すれば、怠慢の罪に当たるだろうが、何かに積極的に取り組んでいる時の失敗を、どう考えるかである。

私はいくつもの失敗を重ねてきた。経験のないことをやれば、うまくいかないのは当たり前だ。欠陥がでる。それを改良する。また別の欠陥が出る。

トライアル・アンド・エラーの連続である。エラーは出るものなのだ。むしろエラーを恐れてトライしないことが責められねばならない。

ここで注意すべきことはトライした後で、エラーをみつけ出す能力が、その人に備わっているかどうかである。自分を客観視する能力がある。高く広い判断力を身につけることが大切だ。

【石井 孝氏のひと言】

電電公社の正副総裁は、共に政府の任命であった。そういうこともあってか、幹部諸侯は、世事に大分神経を使っていたようで、全社的にもそのような雰囲気があった。

真藤さんの強権発動でスタートした内製化も、NTT と同時に生まれた新電電会社とNTT の市内網を接続するゲートウェイ交換機に的を絞り、作業も何とか軌道に乗り、新電電会社のサービス開始に間に合わせるべく進捗していた。しかしながら、目前になって設計上の考慮漏れが発見され、大幅な手戻りが必要になってしまった。

世間に公表されている新電電会社のサービス開始日に間に合わないかもしれない。そのような事態になれば、間違いなく「NTT は新電電の営業を妨害している」と非難の嵐になる。

困り果て、真藤社長に状況を説明した。「このままですと間に合いません」。真藤さんはこともなげに言った。「(遅れても) 構わん。任せるから思い切りやれ、外野のことなど気にするな」。

てっきり「遅れは許されない。メーカーの手を借りて期日までにしあげろ」と言われるだろうと覚悟していたが、あつけにとられた。

帰って、仲間達に事の次第を話すと、皆、こんなことは入社以来初めてだと奮い立ち、徹夜につぐ徹夜で期日までに無事やり遂げてくれた。

これに関連してもう一つ。

「やる気」「やらせる気」が責任の本質、するっとうまくいったはムダの証拠。

責任というのは、間違いなくそれをものにするかどうかということではない。目的はそこにあるのだけれども、まずその宿題の趣旨にそって、その個人は個人、集団は集団としてやる気になっているか否か。あるいは、やる気になってやるようなふうに管理者が仕向けているかどうか、まず組織の責任論の第一歩だと思う。法律的な表現で、各部門、各セクションの責任と権限を明確化するといっても、それはできるものではない。法律の問題ではなくてモラルの問題なのだから。

失敗したら責任を取るというような言葉があるので、通俗的には責任というとすぐ失敗に結びつけるということがあるが、やっている者が一番先に、自分のやっている悪さを見つけるはずなんだから、やって悪かったら直すというふうにやっていたら、失敗が表面に出てくるはずがない。失敗が表面に出てきたら、それはやったあとのトレースをしなかった証拠である。

会議をやったら、それで目的を達した気分になってしまって、やった結果をトレースしてまた会議をやり直すとか、別の会合を持つとか、そういう仕事の追いかかけ方が必要である。途中でやり方を変えずに、するっとうまくいったとしたら、初めの計画が段取りが大きすぎる。むだをうんと持っているから修正しないで済んだ、非常に能率の悪いオペレーションをやった、ということになる。

技術協力の思い出（４）

カンボジャで義足支援 —その25周年記念行事に参加—

地震廃絶日本キャンペーン代表 北川 泰弘

1. カンボジャで義足支援

カンボジアは地雷／不発弾で手足を失った人が多い。公式発表によると、2012年の地雷／不発弾による死傷者数は186人／年で世界の5位であった。1990年代当初は世界1位で毎年3,000~4,000人の死傷者があった。その頃、JTECはカンボジアの交通・郵便・電気通信省総局長ネット・チュルン氏を日本に招いて電気通信の技術協力を申し出た。それに対し総局長は、電気通信は既にオーストラリアの会社の援助を受けている。

寧ろ、地雷等で足を失った職員に対する義足援助を日本がやってくれると有難いと言われた。それを受けて、JTEC の小松敬明部長（KDD）の発議で、1992 年の春に、カンボジアに対する電気通信技術協力の創始者である興寛次郎氏を会長に戴き、私が事務局長を勤め、義足支援の NGO「プノンペンの会」を立ち上げ、NTT、KDD、郵政省、電気通信関連業界の皆さんに趣旨を説明して、100 円でもお願いしますと、個人の募金をお願いした。

「プノンペンの会」は立ち上がったが、義足は未知の分野である。所沢の国立身体障害者リハビリテーション・センターの初山泰弘総長に協力をお願いして、義肢装具の分野で国の内外で顔の広い田澤英二氏の支援が得られることとなった。募金は NTT はじめ全国の電気通信関係者の好意で約 3,000 万円が集った。この資金を元に、郵政省の国際ボランティア貯金からの補助金を申請し、補助が受けられる事となった。しかし、募金を毎年やる訳に行かないし、ボ貯金の補助金は 2-3 年で打ち切られる。それでは、現地に義足工場を建て、永く運営することは出来ない。1992 年 9 月に田澤氏他 1 名に「プノンペンの会」から富田實（KDD）と私が随行して現地の事前調査をした所、既にプノンペンに義肢センターを建て、義足を製造している英国の NGO（CT, The Cambodia Trust）のトニイ・モーリス氏と田澤氏がポン友であることが判り、トニイ氏のご好意で CT の製造設備を借りて義足を作る事となった。

1993 年 2 月に、田澤氏ほか若手の日本人義肢装具士 7 名を、義足材料持参で 1 週間カンボジアに派遣し、CT の設備を借用して義足 30 本を作って同省の地雷による切断者に贈った。その実績から、日本の義足業界に、カンボジアに行って義足を作って協力したいという若い義肢装具士、藤井一幸氏ほか数人が現れて、プノンペンの会の資金で日本人の義肢装具士を 2 年づつの任期で派遣して CT の仕事を手伝う事となった。「プノンペンの会」は 1993 年 8 月から 1996 年 1 月に田澤英二氏を代表とする NGO「希みの会・HOPE」に引き継ぐまで、義肢装具士を累計 6 名派遣した。「希みの会・HOPE」はカンボジア人義肢装具士が育って日本人が不用になる 2003 年 6 月まで派遣を続けた。藤井氏は 2 年の任期を延長し、1993 年 8 月から 2003 年 6 月まで 10 年間、CT に勤務された。

CT は 1995 年に地方の 2 都市、シハヌークビル、コンポンチュナンに義肢センターを開所した。日本人義肢装具士もこれら地方都市に派遣されて開所からの数年間を手伝った。コンポンチュナン義肢センターの開設に当たり、設備購入費の一部を「プノンペンの会」が負担し、1995 年の開所式には興寛次郎会長が、興氏にとって 35 年ぶりにカンボジアを訪問して開所式に参列し、祝辞を述べた。

また、CT は 1994 年に、CT のみならず他団体のカンボジア人義肢装具士のみならず、

北朝鮮を含むアジアの国々の義肢装具士の養成の為に 3 年制の学校 (CSPO, Cambodia School of Prosthetics and Orthotics) を発足させた。そのカンボジア人卒業生が 1997 年からカンボジア国内各所の義肢センターで働くようになった。「希みの会・HOPE」が 2003 年 6 月に日本人義肢装具士の派遣を止めたのは、CSPO の卒業生が年々増えて、人件費の高い日本人が必要なくなったからである。

2012 年 12 月 1 日に、義肢センターは CT からカンボジア政府の社会福祉・青少年・復員軍人省に移管され、CSPO は同省所管の大学となった。ダイレクターは、米国人のメアリーから CSPO の卒業生のカンボジア人女性、ケン・シサリーに引き継がれた。

そのようなことで、「プノンペンの会」と「希みの会・HOPE」は CT 義肢センターの発展期に深く関わっていた。

2. CT のカンボジア活動 25 周年に参加

この CT のカンボジア活動 25 周年に、私と元「プノンペンの会」のメンバーとして岸政邦氏が参加した。

CT で得られた情報に、CSPO に私費留学して卒業後、米国の NGO 「ベテラン・インターナショナル・カンボジア、VIC」の、地方都市「プレーベン義肢センター」で義肢装具士として働いている、唐沢幸子さんから得られた情報を加えて整理すると以下の通りである。



写真 1 表彰された 15 人の障害者

CT の 25 周年祝賀は、2014 年 1 月 24 日の夜、ホテル「ひまわり」のメコン川を臨む庭園で、CSPO の現役の生徒も参加して、カクテル・パーティの形で行われた。CSPO の生徒には、アフガニスタン、ソロモン、バングラデッシュ、スリランカ人等が居て、CSPO がカンボジアばかりでなく、色々な国々の義肢装具士を養成する学校であることを示していた。

25 年前は、足を失った人に義足を贈ることが犠牲者支援であった。現在は、義足を贈った上で職業教育をし、或いは能力のある人には大学教育を受けさせ、社会復帰が出来るまで支援することが本当の犠牲者支援であると考えられている。

これには、カンボジアが 2007 年に署名し、2012 年に批准した「障害者権利条約」が大きく作用して、障害者支援の概念が大きく変わったためと考えられる。

障害を受けたことは前世の報いで、世間に向けて恥ずかしい、障害者は家に引き籠る、というのがカンボジア旧来の考え方であった。



写真2 プノンペン障害者自立センターの職員、後列左端筆者 右端岸政邦氏

この旧来の意識を改革する為のカンボジアの NGO が生まれて活動を開始していた。

日本の NGO「日本財団」が 2009 年から、障害者が大学教育を受ける為の奨学金を与えていることを始めて知った。

奨学金を本人に渡すと、大金を手にした本人が勉強以外に悪用しがちなので、管理の厳しい組織を通じて支給される。今回表彰された 2009 年度奨学生には地雷被害の多いカンボジア北西部の学生がおらず、地雷被害者が居なかった南東部の州の学生であった。

記念イベントの前日、1月23日（木）にCTが車を出し、我々「プノンペンの会」代表をプノンペンの北 90 kmの地方都市コンボンチュナンの義肢センターに案内してくれた。「プノンペンの会」が 1995 年に同センターの開所に貢献したことを、ダイレクターのシサリーさんが評価してくれたものとして嬉しかった。



写真3 シアン・モームさん

1986 年にパイリンの戦闘で足を失い、2008 年に「難民を助ける会、AAR」のキエンクリエン・センターで職業教育を受け、バイク等の修理で自立した

コンボンチュナンの郊外で、元兵士で 1986 年、87 年の内戦に参戦して地雷で片足を失い、その後、日本の NGO で職業教育を受けて自立している 2 名の障害者の仕事場に案内され、障害者の職業教育の成果を目の当たりに見ることが出来た。尤も、この二人はバイクや、ポンプのエンジン修理で成功したが、縫製、竹細工、民芸品製作、テレビ・ラジオ修理等の職業教育を受けた障害者はその後どうなったか？成功したのだろうか？と考えさせられた。

また、CT が過去に義足を提供した切断者の現状を良く把握していることにも感心した。

トンガ王国における防災 ICT パイロットプロジェクト完了

(一財) 海外通信・放送コンサルティング協力 (JTEC)
通信技術・システム部長 田村正人

2014年3月20日、南太平洋のトンガ王国にて防災 ICT パイロットシステムの完成式典が、トンガ国皇太子殿下・皇太子妃殿下、首相以下各大臣、在トンガ日本国大使館など各国駐在公館代表、アジア・太平洋電気通信共同体 (APT)、日本国政府 (総務省) などのご臨席のもと盛大に執り行われました。



(写真 1) 式典で早期警報サイレンを起動するトゥポウトウルクララ皇太子殿



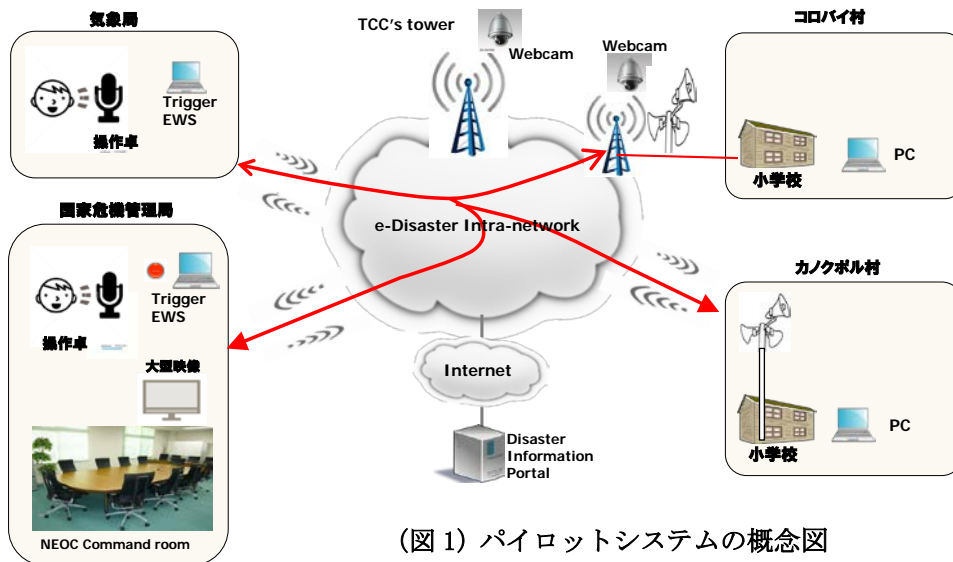
(写真 2) 基調講演を行うツイヴァカノ

このプロジェクトは日本政府特別拠出金による APT の ICT パイロット・プロジェクト (APT-EBC-J3) です。日本側 (日本無線 (株)) 殿、ICT 海外ボランティア会殿、JTEC) とトンガ政府との共同実施体制で 2012 年度に APT に申請し、採択され、所定の 1 年間で設計・構築・評価を実施しこのほど完成し本格運用に供することになったものです。



(写真 3) 完成式典会場となったカノク
ポル小学校の同報放送スピーカー

今回整備したパイロットシステムは、主に津波被害軽減を目的とした早期予警報システムと、防災関連組織における情報共有や国民への情報発信に威力を発揮する国家防災ポータルサイト、高所カメラ映像システムなどからなる防災情報システムで構成されています。



(図1) パイロットシステム概念図



(図2) 国家防災ポータルサイトのトップ画面

プロジェクトの実施にあたっては、トンガ国政府、通信事業者、放送局等の全面協力を得て、既存の携帯基地局鉄塔や無停電電源の提供を受けるなど、現地側と息の合った活動ができました。また基盤ネットワークとして今回整備した 4.9GHz 帯ブロードバンド IP 無線システムの利点を活かし、高所監視カメラで島内の様子を見渡せたり、プロジェクトサイトとな



(写真4) 高さ 60m に設置した高所監視カメラからの映像

った小学校にインターネットを提供するなど、平常時に防災以外の用途にも活用したいというトンガ側のニーズを最大限反映させました。

施工は日本無線(株)殿の指導のもと、トンガ通信会社 (TCC) を中心とした現地スタ

ップにより行われました。工事を指揮した日本無線の橋本リーダーによると、現地特有のゆったりとした時間的感覚に戸惑うことも多々あったようです。また期間中トンガのハアパイ諸島が巨大サイクロンで壊滅的被害を受けるなど大きな災害が発生し、期限内での完成が一時危ぶまれましたが、現地チームの突貫工事で何とか間に合わせる事ができました。



(写真5) 現地メンバーによるアンテナ建柱作業風景

トンガは人口約10万人、地勢的に地震、津波、サイクロンなど自然災害に極めて脆弱であり、海面上昇など気象変動の脅威にもさらされているため、防災対策に特に力を入れています。



(写真6) システム評価を終えたメンバー

私たちのトンガでの取組は、2011年当時ICT海外ボランティア会の全面的支援のもと、トンガ政府情報通信省に JICA シニア海外ボランティアとして派遣されていた鈴木弘道氏（当会会員）との連携から始まり、2012年に実施したトンガ政府との防災 ICT（e-Disaster）の共同研究（APT-J2プロジェクト）が今回のパイロットシステムの出発となりました。



(写真7) 完成式典で披露されたカノクボル村小学生による踊り

本プロジェクトは、トンガ政府内で国家全体の防災能力向上に向けた施設整備の第一ステップの位置付けられています。JTECではこのプロジェクトの成果がトンガ国のハイリスクエリア全体に、そして同様な状況の国々に暮らす人々の安全に結びつくような開発案件の形成に結び

付けられるよう引き続き取り組んで参ります。これまでの足掛2年間のトンガでの活動を振り返りながら、今回の完成式典でトンガ側から示された日本への感謝の気持ちや今後への期待をしっかりと受け止め、確実に次につなげて行かなければとの思いを新たにしました次第です。

なおこのプロジェクトの実施にあたり、プロジェクトリーダーとしてご尽力いただいた日本無線(株)殿、アドバイザーとしてご助言いただいた ICT 海外ボランティア会殿にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

JICA 訓練所訪問記

“ボランティア候補生は輝いていた”

ICT海外ボランティア会事務局長 加藤 隆

私は去る2月13日(木)・14日(金)に1泊2日の日程で、長野県駒ヶ根市にあるJICA駒ヶ根訓練所に、ボランティア候補生(派遣までは候補生の立場)の派遣前訓練の見学に訪れた。そのきっかけはJICAからのメールによる「ご案内」に応じた。今回はJICAが力を入れている「民間連携ボランティア制度」(注)促進に当たり、これに関心のある企業に呼びかけ、JICAボランティアの実態を認識してもらおうとするもので、一行は11名で私以外は企業からの参加者であり、JICAの方が引率してくれた。

私は、当ICT海外ボランティア会活動の主旨に従い、皆様にJICAボランティアへの参加をお勧めしていることから、派遣前訓練の様子を皆様にお知らせしたいとの思いから参加させていただいた。

◆訓練所と訓練概要

13日早朝、新宿西口からJICAで準備したバスに乗り中央道を一路駒ヶ根へ。青空を背景に車窓から見える雪をいただいた信州の山並はきれいだった。

昼過ぎ訓練所到着。シニア海外ボランティア(SV)候補生は数日前に訓練を終えて帰郷していて、青年海外ボランティア(JOCV)候補生70名程が訓練中である。早速、訓練概要の説明を受ける。



派遣前訓練とは、「途上国の日本と異なる自然・社会条件のもとで、現地の人々と協力活動を展開するために、異文化理解力、技術力、コミュニケーションスキル、更に持続的情熱、心身の健康が求められます。これらを合宿制で訓練するものです」。(JICA 資料を要約)

派遣前訓練は年 4 回行なわれ、1 回当たり SV は 35 日、JOCV は 70 日で、JOCV の場合その内おおよそ半分は、任国で使用される語学研修に当てられる。同様の訓練は福島県の二本松訓練所で実施されるが、それは任国によって振り分けられる。両訓練所で年間 1,200 名～1,300 名への訓練を行なわれている。

◆体験的見学

今回の訪問は多分に体験的であった。宿泊は候補生と同じ質素な個室で、風呂やトイレは共同で、そして規律は厳しい。起床は 6 時 20 分で、30 分より凍てつく戸外で朝の集いがある。

私にとって幸か不幸か翌 14 日は雪だったので体育館兼講堂で行なわれたが、ラジオ操には我々も加えていただいた。その後ランニングやダンス等（今回はフラメンコ）をう運動の時間があり、男女の区別はなく、れらは全て候補生により自主的に行なわれている。宿舎内では禁酒禁煙とのこと。食堂候補生と一緒に談話しながら楽しい食事をつた。食事の準備や食後の皿洗いも候補生当番で手伝い、訓練所周辺を自主的に清掃もするとのこと。また配属が途上国の僻地でも生活できるよう、髪の手切り方、魚のさばき方、応急手当、少ない火で料理の仕方等の実技を習得する機会も設けられている。



た
体
ン
行
こ
て
で
と
が

また 13 日の夕食後、訓練所の所長はじめ幹部の方および我々一行の懇親会が、近くの居酒屋で和やかに行なわれ種々意見を交換した。

◆「アッサラーム アライクム」と「アーユボーワン」

「アッサラーム アライクム」はバングラデッシュなどで話されるベンガル語で、イスラム教徒が用いる“こんにちは”とのことである。この授業を見学した。教室はネーテブの講師を囲んで笑が絶えない。彼らは講師と簡単な会話を交わすほどで急速に進歩している。この受講生 7 人内 6 名が女性であった。JOCV では女性が男性より多い。女性の逞しさを感じた。



「アーユボーワン」は同じ意味のスリランカなどで使われるシンハラ語で、30 分間この模擬授業を受けた。ネーテブの講師の周到な準備で模擬授業と云えども密度が濃い。最後にはシンハラ語で簡単な自己紹介をさせられる。このスピードにはなかなかついて行けそうだったが楽しかった。

◆JOCV 候補生との意見交換会

我々11名と候補生5名で意見を交換した。一行の構成から候補生は全て企業経験者で、企業を退職した候補生もいた。彼等の JOCV 応募動機は、今の日本社会や会社に飽き足らず、新分野にチャレンジしたいとのこと。最近若者の多くは転職したい気持ちを持っているが、踏み切れないでいる場合が多いと異口同音に話していた。考えさせられるものがあった。また、このピリッとしたこの合宿訓練に対し、JOCV としての予備知識はもとより、人間性陶冶にも有効で、語学が身につくことなど前向きな感想を述べられた。この5名のみならず、候補生一人一人が輝いていた。

◆金の卵の集団

かつて JOCV 帰国後の就職探しが課題であったが、JICA による 23 年度帰国者 1,402 名に対するアンケート調査では、有効回答者数 1,128 名のうち進路決定者が 97.4% で大幅に改善されている。これは日本企業の海外進出傾向の影響もあろうが、彼らの現地での活動を通して得られたバイタリティ、精神的強靱性、柔軟性、人間性などが次第に社会や企業に認知されてきたためと思う。これには JICA の PR 活動の効果もあろう。そして次のことも伺った。それは JOCV 候補者と合同で訓練した SV 候補生が、「このような青年を自社で採用したい」との感想があったり、SV OB から「JOCV OB/OG を採用するにはどうすればよいのか」との問合せがあるとのこと。SV と JOCV の合同訓練の効果の一つかと思う。このことから JOCV 経験者は企業にとって将に金の卵で、彼等を多く抱える企業は金鉱脈を持っていると思った。

駒ヶ根訓練所は、JICA ボランティア訓練を行なう場のみならず、地域の中高校生への国際理解に役立ったり、地方公共団体と連携行事を開催したりで、なくてはならない存在となっている。最後にこの見学にあたり、訓練所の多くの方々の懇切丁寧なおもてなしや、同行された JICA スタッフの配慮に感謝いたしたい。帰路は前日と打って変わって中央道は大雪で寒々としていたが、私の気持は充ちていて、バス車内の雰囲気は暖かだった。なお今回の見学会の食費や懇親会費は自弁です。(写真は JICA 提供)

(注)「民間連携ボランティア制度」

企業では社員を JICA ボランティアに派遣し、途上国開発に貢献しながら、現地活動を通して語学、ビジネスに不可欠な幅広い視野、高度なコミュニケーション能力、異文化適応能力などを身につけ、現地でのネットワークを構築するなど、帰国後に企業活動に還元することを期待しています。このようなニーズに応え、企業と JICA が連携しグローバル人材を育成する制度です。

募集時期は随時で、選考は企業内で人選し JICA に推薦し、JICA で書類選考・面接・語学力審査を行われます。受入国・要請内容・職種は企業のニーズを踏まえて決定し、派遣期間は長期・短期があります。(JICA 資料を要約)

JICA シニア海外ボランティア 2014 年度春募集

事務局

シニア海外ボランティア 2014 年度春募集は 4 月 1 日（火）より 5 月 12 日（月）まで行なわれております。

「JICA シニア海外ボランティア春募集要請一覧」より、当会会員が応募し易い要請案件を抜粋しました。これを参考にいただき、積極的に応募されますことをお奨めいたします。最近、「電気通信・情報通信に関する応募者が減少の傾向にある」（JICA 担当者）とのことです。奮ってチャレンジしてください。

区分、職種	国・配属先	要 請 内 容
計画・行政 コンピュータ技術	マレーシア、日本 マレーシア技術学院	組み込みシステム開発の授業開始に必要な指導をインストラクターに実施
同 上	カンボジア、公共 事業リサーチセンター	ネットワーク再構築（VLAN 化）・業務アプリケーション有効利用支援、 ドキュメント管理・システム運用管理の研修実施
同 上	スリランカ 職業訓練大学	学生へネットワーク分野の指導、Lab の運用維持管理助言、 学生プロジェクト立ち上げ指導
同 上	パプアニューギニア 国立最高裁判所	裁判所の新規システム開発のための提案・構築、同僚の教育、 ITポリシー運営上の助言
同 上	ケニア、マチャコス・ユニ バーシティ・カレッジ	eラーニングシステム構築支援、マイクロソフト・アプリケーション及びプログラミング言 語の基礎等を担当
同 上	ザンビア 母子保健局	Monitoring & Evaluation システムの支援、Webポータル管理、 e-learning 充実に協力
同 上	ザンビア ザンビア大学	電気電子工学科において、コンピュータ・セキュリティ技術・ICT の講義、 修士課程学生に個別指導、同僚の講義アドバイス
公共公益事業 電気通信	ザンビア ザンビア大学	電気電子工学科において無線通信技術の講義・実習、 修士課程学生に個別指導
鉱工業 電気電子機器	パラグアイ 職業能力開発局	日本パラグアイ職業能力促進センターで、デジタル回線設計・アナログ回線 設計の指導。実習機材整備・講義にも協力
同 上	ブータン 王立ブータン大学	電気工学科で Power Electronics and Control system ・電気 機械分野の講義・実習
同 上	ブータン 職業訓練校	新規開講の電子科で電気通信・電子機器分野の講義・実習、同 僚講師への提案・助言
同 上	キジコ 工業高校	電子・マイクロエレクトロニクス・自動化分野で、同校教員の能力強化及びカリキュラム 内容の検討
同 上	ガーナ 技術短期大学	電子回路や PLC 等の指導、実験室整備、同僚講師への技術共 有・助言

区分、職種	国・配属先	要 請 内 容
同 上	ボリビア 職業訓練校 1	実習機材の適切な操作・管理、同僚教員に操作・メンテナンス指導、整備に関する助言・指導、アプリケーションソフトの開発支援
同 上	ボリビア 職業訓練校 2	実習機材の整備に関する助言・指導 上級コース開設に向けた技術的支援
同 上	ペルー 全国工 業訓練機関 1	電子電気技術（自動制御）分野の講師育成 カリキュラム改善・学生の企業実習モタリソグ等支援
同 上	ペルー 全国工 業訓練機関 2	PLC・プロセス制御等自動制御分野の訓練コース講師の知識・技術向上、教授法改善のための協力

エネルギー 再生 可能・省エネルギー	ネパール 国立 科学技術院	既存ソーラー設備の維持管理・データ収集分析・技術指導 分析結果に基づき今後の実現化に向けた助言
商業・観光 経営管理	パラグアイ アスンシオン大学	大学関係者を中心とした企業準備、起業後の支援 今後の業務内容の強化・改善に向けた協力
同 上	ザンビア ザンビア開発庁	カイゼン活動により、中小零細企業の経営支援
同 上	ザンビア 技術事業化センタ	新規事業等のアドバイス、現データベースの維持・管理
同 上	タイ 産業振興局	タイ中小企業へ日本関連ビジネスの助言、日本中小企業へタイ関連 ビジネスの助言・情報提供、タイとのビジネス連携
商業・観光 品質管理	コロンビア 科学技術センター	中小企業生産性向上プロジェクトサポート、5s 推進活動支援 教材改善・教育プロジェクト実施体制確立
同 上	ウズベキスタン 商工会議所	中小企業対象にカイゼン教育研修企画・実施 モデル企業に対し直接経営改善指導
同 上	フィリピン 科学技術センター	中小企業（食品加工、家具、手工芸品、鉄鋼、製造関連）を巡回 し、省エネ・省資源・汚染物質低減・生産性向上等助言
同 上	ベトナム 中小 企業支援センター	企画・運営能力向上促進 3s・5s を切口にした品質改善・生産性向上支援
同 上	ラオス 中小企業 振興開発事務所	中小企業経営者・管理者に対し 5s・カイゼン紹介 ISO9001 等品質改善システムの普及活動、同僚の能力向上
商業・観光(続) 品質管理	ベトナム 北部中 小企業支援センタ	市計画投資局とも協働し、3s・5s を切口に品質改善・生産性 向上支援、セミナー開催協力、センターの企画・運営向上支援
同 上	ベトナム 南部中 小企業支援センタ	3s・5s を切口に品質改善・生産性向上支援、セミナー開催協力、 センターの企画・運営向上支援
同 上	ベトナム 南部中 小企業支援センタ	3s・5s を切口に品質改善・生産性向上支援、セミナー開催協力、 センターの企画・運営向上支援
同 上	ベトナム 北部中 小企業支援センタ	3s・5s を切口に品質改善・生産性向上支援、セミナー開催協力、 センターの企画・運営向上支援

区分、職種	国・配属先	要 請 内 容
同 上	ベトナム 北部中 小企業支援センター	3s・5s を切り口に品質改善・生産性向上支援、セミナー開催協力、 センターの企画・運営向上支援
同 上	グアテマラ 経済省 中小企業開発局	地域事務所で 5s・カイゼン運動普及のための研修会等企画・実施、 中小企業を訪問し生産性・品質向上に協力
同 上	メキシコ 工業高校	5s 導入後の評価、継続のための支援、5s・カイゼンに関するワークショップ 等実施
同 上	エジプト 生産 性品質向上センター	生産性向上・品質管理コンサルティング・トレーニング実施支援、 同僚へ技術指導・研修教材作成支援

詳細は JICA のホームページをご覧ください。また全国各地で開催される JICA 主催の「募集説明会」にも参加をお奨めします。(開催の詳細も JICA のホームページをご覧ください)。説明会では関係資料が入手でき、個別相談のコーナーも開設されます。

またこれに呼応して、「SV 経験を活かす会」主催の「よろず相談会」も開催されています。同会のホームページに開催の詳細が掲載されています。あわせてご活用ください。

現地便り (コロンビア便り 4)

三輪車の走る街

JICA SV 野村 徹

コロンビアの道路を走っている車は、

- 1、韓国製シュンダイの黄色い小型タクシー
- 2、ブルーのボルボ製大型路線バス
- 3、各国の乗用車とオートバイ

というところですがその中に混じって昔懐かしい3輪自動車と、今では日本で見かけない馬車が走っています。



3輪自動車というとは私はずぐ「ミゼット」という車を思い出します。そしてその当時の町の風景を思い出します。私が子供の頃は乗用車がめずらしくて近所を走っていると近所の友達が家に来て「自動車が走っている」と教えに来たくらいでした。そんな事を思い出させる3輪車ですが、馬車もよく走っています。

私が見たのは荷台に積んだ花を小さな花屋さんにおろしている所で、残念ながら写真には

ありません。3輪自動車も馬車も通りにある小さな店に荷を届けているようです。しかし、最近では交通の邪魔になると言う理由で「馬車」を排除しようという動きがあるようです。

何でも便利を求めて殺風景になってしまった日本の事を考えると、私は「馬車」を残してほしいと思っています。

第7回 海外情報談話会開催模様

事務局

標記談話会は去る4月18日（金）、JTEC（海外通信・放送コンサルティング協力）で開催されました。話題は「JTECの最近の活動状況」で、講師は牛坂 正信氏（JTEC専務理事）で、参加者は30名でした。

講演では最初にJTECの紹介がありました。JTECはICT分野の国際協力を行なうわが国唯一の公的機関です。30年以上にわたる経験と実績を礎に発展途上国のニーズに対応すると共に、日本企業の海外展開の切っ掛けを作り、世界の情報通信の発展に寄与しています。しかし近年、途上国の通信キャリアの民営化が進んだり、わが国企業の海外進出が以前ほどでなくなったことなどから、ODA案件が少なくなり、補助金事業の終了や次世代を背負うグローバル人材が少なくなって来ているなど環境の変化があります。それで本業の外にこれを支える収益確保の事業も行なっています。



具体的にはミャンマーの地方・農村開発に貢献できるICTシステムである「ミャンマー国 e Village」、「バングラ国 e-West 調査」や、当 ICT 海外ボランティア会活動が切っ掛けとなった「トンガ国 e-Disaster 通信網」などのプロジェクトがあります。

講演後、ミャンマーへ進出する場合の課題等について、現在ミャンマーで活躍されている参加者の経験談をも含めて、活発な意見交換がなされました。

第8回海外情報談話会開催のお知らせ

ICT 海外ボランティア会
共催 情報通信国際交流会

第8回海外情報談話会を以下により開催いたします。参加をお待ちいたしております。

日 時：平成 26 年 5 月 30 日（金） 午後 3 時～5 時

場 所：JTEC（海外通信・放送コンサルティング協力）

（東京都品川区西五反田 8-1-14 最勝ビル 7 階 03-3495-5211）

JR 五反田駅より徒歩 5 分

（JTEC は昨年 2 月に転居しました。道順は JTEC のホームページをご覧ください）

今回の場所は、情報通信エンジニアリング協会ではありません。

話 題：インドネシア・タイにおける最新のモバイルコミュニケーション

講演者：佐藤 仁氏

情報通信総合研究所 グローバル研究グループ（副主任研究員）

講演内容：

現代社会はグローバル化が高度に進展しています。グローバル化の特徴は、「世界的な規模での人・物・金・情報の流れ」と「新興国の台頭」です。今回はアジアの新興国の代表であるタイとインドネシアにおける「情報」の流れに注目していきたいと思います。

平均年齢 28 歳のインドネシアでは携帯電話の加入者数が 2 億 8,000 万人を超え、人口普及率が約 120% です。タイでは携帯電話加入者数が 8,700 万を超え、人口普及率が約 135% です。携帯電話はインドネシア人、タイ人にとって欠かせないアイテムとなりました。日本でもお馴染みの LINE のようなメッセージングアプリも非常に人気があります。両国におけるモバイルコミュニケーションの特徴を紹介していきたいと思います。

またジャカルタで流行している AKB 48 の姉妹グループ JKT 48 など最近のインドネシアの若者の生活スタイルを探っていくことによって現在のインドネシア社会を紹介していきたいと思います。

参 加： 入場料無料 お気軽にどうぞ！（会員制ではありません）

参加ご希望の方は、事務局 加藤隆 kato2415@jasmine.ocn.ne.jp までご一報下さい。

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申し上げます。

送付先は、編集担当 加藤 隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp),または

村上勝臣(katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp)までお寄せ下さい。

編集後記

・多くの関係者の支援をうけて、当会の活動が切っ掛けになって始められたトンガの防災通信システムプロジェクトが、予定通り無事終了した報告を JTEC 田村様からご寄稿いただきました。完成の祝賀会には同国皇太子ご夫妻、首相をはじめ関係閣僚、APT 更には日本からも総務省様はじめお歴々が参加された由、このシステムに対する現地の期待の大きさが推量されます。私もトンガおよび日本での共同研究会に参加する機会をいただきましたので感無量です。このプロジェクトのグローバル的な水平展開を期待するとともに、わが国産業の海外展開に少しで役にたてばうれしい限りです。

・当会主催の海外情報談話会の 7 回目は JTEC 牛坂様に JTEC の活躍状況をお話いただきました。改めてグローバル人材育成の重要性を痛感しました。現在 JICA SV の春募集が行なわれますが、わたしの SV 経験からも海外ボランティア経験が、何かにつけて とても有効かと思えます。JICA 駒ヶ根訓練所見学記を寄稿させていただきましたが、このピリッとした訓練を含め、海外ボランティア経験が次ぎえの大きなステップになると信じています。それで皆様に JICA の SV や JOCV への応募をおすすめいたしたいと考えております。

(以上 加藤)

・石井孝さんの「真藤語録」今回は「ゲートウェイ交換機」開発の逸話が紹介されました。不具合発生の報告に対して「(遅れても) 構わん。任せるから思い切りやれ、外野のことなど気にするな」と答えた真藤さんの態度は痛快に感じました。

・加藤さんの「駒ヶ根訓練所訪問記」訓練の様子「うーん」と感心しました。かつてトンガ、カンボジアの SV 時、同期の JOCV 達の行動を見てそのルーツはそこにありと、今更ながら納得しました。

・現地便りは紙面の関係があり、野村さんの「コロンビア便り」だけにしました。山下さんの「ソルト便り」次回以降へ掲載します。

(以上 村上)

総編集長：ICT 海外ボランティア会 事務局長 加藤 隆

編集長：ICT 海外ボランティア会 報道部長 村上勝臣

発行：ICT 海外ボランティア会 (メール：sv@info.nttob.org/)